

■ 努力の花 ■

先週の木曜日、ピロティ前は、発表を待つ受験生とその家族が大勢集まっていた。ちょうど正午、合格者番号を張り出した掲示板の白い布が取られた。自分の番号を探す。あちこちから歓声上がる。「あった」「合格した」の声が飛ぶ。寒い冬を越え、15の春に笑顔の花が開いた。

友達と抱き合って喜びを分かち合う者、親とがっすり握手する者、買ってもらったばかりだろうか、ぎこちなくスマホを操作して連絡をする者がいる。まずは「合格おめでとう」と言いたい。我々としても、本校への入学を夢見てくれていることは素直に嬉しく、迎える側として気が引き締まる。



そんな中でも、肩を落とし、無言で帰って行く受験生もいる。定員がある以上、涙を飲む者が出るのは仕方のないことだ。親友と別の学校に分かれなければならない者もいるかもしれない。たとえ学校は異なっても、絆を保ちながら、それぞれの学校で切磋琢磨していければいい。

合格を得たことは、ひとえに各自の努力のたまものであることは確かだが、多くの人の支えがあつてのことだろうから、感謝の意の下に、浮かれることなく、高校生活への決意を謙虚に胸に刻んでほしい。また、本校に入学したくてもできなかった受験生に対して恥ずかしくないような3年間を送る義務があることも忘れてはならない。

齢を重ねれば、嬉しい思いも悔しい経験も全てが糧となっていると気づく。だから、どの学校に進んだかは、長い人生にとってはさほど大きな問題でない。むしろ、これからの3年間をどのような目標を持ち、どのように過ごすかの方が圧倒的に重要である。

「努力できることが才能である」とは松井秀喜の座右の銘。国民栄誉賞の受賞が決まったときのインタビューで「野球人生で最も思い出に残っていることは？」の問いに、ホームランでも MVP でもなく、「長嶋監督と宿舎で素振りを重ねたこと」と答えている。

目標達成への努力のプロセスこそ生涯の財産である。4月からは、新入生と1つ進級した在校生で努力の花を咲かせようと思う。

平成30年度が終わろうとしている。明後日は終業式。今日はその式辞を書いている。1年を振り返り、No.1 で書いたことを読み返す。「来年の雪解けに咲き揃う水仙を想う。1年後の楽しみが一つ増えた」とある。いま、校長室の窓に沿う金木犀の足下の水仙は、開花はおろか蕾ひとつすらない。日当たりが悪いとはいえ、どうしたことだろう。

だが、前向きに考えよう。水仙の花言葉は「自己愛」。きっと、「うぬぼれ」の花を咲かさず、「努力」の花を咲かせろという、自然界からの校長への警句である。